

講 演

(本記要所載論文は凡て署名者の責任にして本會の意見を代表するものに非ず)

東西文化連續の實例

早稻田大學教授 西 村 眞 次

世界に於ける文化が連續的であるか否かについては二三の異つた説がある。其の一つは最も古く主張せられたもので、文化は獨立的に生れ、各地方で別々に發達したと説く獨立起原説である。或は之を自發説とも稱する。世界の隅々までの研究が十分行届かなかつた時代には、文化は各民族に依つて獨特に形成されたと信ぜられる理由があつたからである。然るに學者の研究が漸次に廣汎に亘るに及んで、非常に隔絶した互に沒交渉な兩地に於て殆ど同一の文化があり、而も其の近似關係は、研究の精密度と正

比例して際限もない廣範圍に發見せられたので、茲に其の各々が個別的な生育を遂げたものとは到底認められなくなつた。そこで次には右の第一説を改訂して、環境に因る近似を説く學者が出た。即ち彼等は相隔絶した甲乙兩地に類似的文化を發見するのは環境の類似に起因してゐる、環境が相類似して居れば、假令其の發生の起原を異にしても、結局同形の文化状態に達する、これは同形の環境に棲む魚類又は獸類が、各別異の地に於て近似の形を取るのと同様の關係であると説いた。此の説は第一説に比較すれば稍々進んだ説で、必ずしも其全部を否定するとは出來ないが、併し之を文化の上に應用し得るかどうかは疑問である。次に第三の説は傳播説である。これは今日最も有力な説であつて、文化の同形原因を傳播に求め、甲乙兩地の文化の同形は、初め甲地を中心に發生した文化が、漸次に乙丙丁の各末梢地に移動し、それが各地に於て定着の形を取ると、次には又其の地を中心として、更に別個の各末梢地方に傳播すると説くのである、即ち斯くして世界の文化は、漸次傳播の過程を経て今日に至つたとするのであつて、之を漸次傳播説とも稱する。世界文化の研究が此の境地まで進んだのは、世界の隅々まで廣く研究が行互つて、對象が増多し、材料が漲溢するに至つた結果であつて、假に此の説を正しいとするならば、或る單原から發した文化が多數の幅射線を引いて連續的に世界の各地に擴布した事實を我々は肯定せねばならぬ。私は今此の説を支持して、日本其他と希臘との間に文化的連鎖の實證を求めて見たいと

思ふ。

斯の如き連鎖の證明は、文化のあらゆる方面に於て可能であるが、私は先づ神話について試みたい。但し話の筋を追ふだけでは危険であるから、之を文化人類學的に證明する方法を探らうと思ふ。

二

如上の目的の下に、私は日本神話の中から、假に五個の題目を選出する。

第一は八岐の大蛇がアシナヅチ、テナヅチの娘を毎年一人宛犠牲に要求したのは何故であるか、其の意義如何の問題である。

第二はオホナムチの尊が火傷の刺戟によつて死んだ時に、キサギヒメとウムギヒメとの力で尊が蘇生し得た理由如何の問題である。

第三はホオリの命が海神の宮から二つの珠を得て歸つて、曾て難題を云ひかけた男神を苦められたこと。又、浦島子が龍宮から玉手箱を持ち歸つて開けると、忽ち老衰死に陥つたこと。是等の理由如何の問題である。

第四には、スサノオの尊がオホナムチを蛇室に入れた時に、スセリヒメが之にヒレを與へ、オホナムチが之を三たび振ふと、蛇が退き去つたので、害を免れることを得た。これは如何なる理由に因るかの

問題である。

最後に第五としては、イザナギの尊が黄泉國から逃げて歸られる時に、八種の雷神が追跡して來たのを、桃の實を投げて追拂つたらば、雷神共は急いで逃げたと云ふ其の理由如何の問題である。

私は是等の五箇の疑問を、東西に連なる一つの思想系統に依つて立派に解釋することが出來ると考へる。是等の神話の各々は、一見した所、各別異のものらしく感ぜられるが、其の根本基調を成してゐるものはと云へば、唯一つの生命欲求の思想である。そして此の思想は、決して日本に於て獨自に發生したものでなく、遙にエジプト、ギリシヤにまでも連續する傳播線を有するのである。此の線の存在を證明するには、地的には日本から近隣の國へ進み、時的には近代から古代へと遡つて行くのが順路であるが、私は便宜上、發達の順序に従つて、逆に最も古いところ、最も遠いところから、説明して行きたい。

三

古代研究に於て最も重要なのは遺物に據る研究の方法である。今其の方法に従つて、世界に於ける生命欲求の思想の最も古い現れを調べて見ると、所謂「オーリニャク文化相」の時代に描いたものとして知られてゐるビンダール洞穴内の壁畫に、簡単な象のスケッチがある。其の腹部の少し上方を見ると、其

處に何かハート形の物が描き出されてゐるが、これは心臓であると認められてゐる。此の心臓は赤色を以て書かれてゐるが、赤色は勿論血液を意味するもので、早く既に舊石器時代の人々が、象の生活には血液の必要であることを認めてゐたことが、此の畫に依つて知られるのである。

次にマグダレニヤンの時期の物になると、今一層明らかなる表現が見られる。それは同時代の壁畫にバイソンの圖があつて、其の脇腹には四筋の矢が射立てられ、其の一筋からは赤い液體様の物が垂れ流れてゐる。これは説明するまでもなく、四筋の矢を射中てられた其のバイソンが、其の中の一筋の矢のために生命を奪はれた事を表示したものである。従來は此の壁畫を審美的對象としてのみ觀てゐた結果、何等か宗教的な表意を持つものと斷定されてゐたが、既に心臓に血液があるために象の生存が保持されることを知つてゐたとすれば、此のバイソンは、其の生命の源泉である血液を失ふた結果、遂に斃れるに至つたことを圖示したものと觀た方が合理的である。

そこで次に是等の壁畫と關聯して、我等の注意に値するものは、第一にビンダル洞の象の壁畫と同時代の物と認められる人骨が、南フランスの或る洞穴から發見されて、其の側には、多數に散布する印度洋産の螺貝を見た事である。此の貝殻は恐らくイタリアから移入されたものと考へられるが、何故に斯かる貝殻が死體の側に散らばつてゐたかについては、久しく適當な解釋が與へられなかつた。ところが

之と類似の現象は、マグダレニアン時代のラウゼリー・パツス洞穴で發見された人骨の附近に於ても見られた。其の人骨は、手を折り膝を折つて、所謂屈葬の形を取つて、比較的完全に葬られたまゝ殘存してゐたが、其の骨格の傍には多數の小子安具が散布されてあつた。其個數は、頭部の附近に於て四個、兩腕と膝、足の附近に各一對宛である。斯の如く數を揃へて整然と散布されると云ふ事は、それが意識的行爲に本づいたことを語るものであるが、恐らくこれは、其の帶のやうな物に附着させてあつたのが、帶は朽敗して貝だけ殘つたものであらう。若しも此の斷定が許されるとすれば、それは何の爲に附けられたものであらうか、之を他の土俗學的證據から推考すると、オセアニア土人が現に行うてゐる如く、或るパワーを得んが爲の一種のマジカルなものであらうかと推察される。即ち其れ等の洞穴の中で死體の傍に發見された子安具は、繁殖促進のマジックに用ゐられたものではあるまいか、と考へられるのである。尤も只さう云つただけでは餘りに突然で、理解に困難であらうが、併し我々は既に象及びバイソンの壁畫に依つて、石器時代人が、血液の喪失を以て死の唯一原因であると認めてゐた事を知つた。既に血液の喪失が死の唯一原因であるならば、生産の行爲は生の唯一過程でなければならぬ。されば生れる子に此の世の最初の光を見せしめる關門は、單なる産出の器官と云ふ考を超えて、直ちに生命の賦與者其のものであつて、子安具は其の「生命賦與者」に恰も酷似してゐるから、産出の器官と同じ

く生命賦與の靈力を持つものと考へられ、人がそれを身に著けて腰飾、腕環、頸飾とすることに依つて、旺盛なる繁殖力を得る呪的效果を得るものと考へたのであつた。

また或舊石器時代の遺跡からは、子安具と同時に動物の牙や爪やを發見してゐる。これらは勿論裝飾品でもあつたが、同時にマジックの爲めの護符でもあつた。牙や爪はそれらが動物についてゐて彼等を扞護したが、彼等の體から離れても觸接の原理によつて、尙ほ其扞護力を保持し、人間がそれを帶んでゐると其生命が扞護されると信ぜられてゐるのである。故に護符には生命保持と生命増殖との二種あつたと見てよい。

四



生命増殖のマジックは最初子安具に就てのみ信ぜられたが、後にはそれが廣い範圍の同形のものにまで始ど無際涯に擴がつた。是等の思想開展の順序は之を正確に痕づけるに困難な場合が少くないのみか、世界文化の黎明は之を西アジアに見るべきか埃及に求むべきかも未解決の問題であるが、私は先づエジプトに就て述べることにしたい。

埃及先史時代の遺物中に、貝殻に穴のあいたのがある。これが裝飾品である事は疑がないが、其の穴の穿ち方には種類があつて、それに依つて首飾に用ゐたものか又腰飾にしたものか分る。同時に又具

殻の種類に依つてもそれが分る。それ等の中には螺貝に突起のある spider shell の類がある。これはアフリカあたりから印度洋にかけて産する物であるが、明らかに子安貝の代用品であると云つて可い。何故に子安貝以外の貝が代用されてゐるのかと云ふと、子安貝は産地が制限されてゐるから、其の需用が多くなるに随つて、子安貝と同質の物ならば、多少形は異つてゐても同一の効力を有すると云ふ原則から、他種の貝類を以て代へたのである。後に至つては、それが更に又、黄金、青銅、石等を以て擬製されることゝなつた。現に埃及の古墳からは其の種の模造品が出土してゐる。此の風習は埃及から始つたものらしく想はれる。即ち最初は専ら子安貝をのみ用ゐてゐたのであるが、それが缺乏すると次には類似の貝を用ゐた。併しそれも亦漸く盡きんとした時に、彼等は偶々沙漠の中に或る光輝ある物質を發見した。試して見ると比較的柔軟で細工が施し易い。そこで其れを用ゐて貝の模造品を作つた。それが恐らく黄金製模造貝の最初であらう。一旦模造と云ふ方法を知るに至ると、彼等は最早貝の缺乏に苦まなかつた。そして、玻璃、滑石、青銅と、加工の材料を得るに随つて、種々の模造品を作り、之を腰などにぶら下げて護符とした。それ等の形は多くは楕圓形か、若くは石斧形である。石斧の形を取つたのは、石斧其のものゝ威力から來てゐるのか、或は全く他の原因から來てゐるのか分らない。

また、十二王朝乃至二十五王朝の遺蹟からは、子安貝を結びつけた結繩が出る。これは記録にはない

が、歐羅巴の慣習で推すと、或は多産を促す爲めに、或は又、惡魔の目つぶしのマジックに用ゐられたであらう。

エジプトの象形文字に  といふのがある。其形は  の如くであるが、ブロードリックやモルトンに従ふと、これは心臟を現したもので、生命の資源の象徴であるといふ。

五

埃及の文化が種々の方向に輻射線を引いて擴がつて行つたことは、歴史的に證明せられる所である。其の中の或る一線は小アジア、印度洋、アフリカ南部に向つてゐるが、或る一線は又クレテ島方面に向つてゐる。直接交通の行はれたのは此のクレテ島方面らしく、其處で發掘が行はれた結果、ミノス時代にそこが文化の中心であつた事が分つた。其の時代の中期の三段階に於て、トリガヒ、ホタテガヒ、タコブネで偶像を作り、或は之を神廟の床の下敷にしてあるものが發見された。

又同じくミケネ時代のものと思はれるイデア洞穴の遺物に、聖壇に獻げ物をして、其の前で男がトリオンを吹いてゐる圖が彫つてあるのがある。トリオンが神聖視されてゐたことは、これでも知られるのである。

次に、カンチアの博物館で古い時代の壺が發見された。考古學者の間で一致した鑑定に従ふと、紀元

前十四乃至十三世紀の間の物だとの事であるが、上部に把手の在る首の細い壺で、全面殆どタコ（章魚）を以て蔽はれてゐる。普通には四面を海と見立て、其中にタコを描いたと解してゐるが、それだけではまだ考へが足りないやうである。

次に又、同じく稍扁平な廣口の壺にタコブネの圖の現されてゐるものがある。これは埃及で發見されたものであるが、エーゲ海で造られたもので、ミケネの特色を持つてゐる。ゴウルニヤ發見の物と同時代と視てよからう。

トロヤ發見の蝟壺——これは古來梟壺と云はれたもので、一見梟のやうに見えるが、實は人面を表出したものだと云ふことに結論を得た。但しエリオット・スミスはタコを表したのであるとの新説を出した。是等のタコやタコブネの表出は、確に子安貝から系統を引いてゐる。子安貝信仰の習俗が、地中海へ入ると、子安貝を得る術のない其の沿岸の住民等はクモガヒを以て代用した。クモガヒは其の名の通りに足とも見える八本の突起を有する貝で、大體に於て子安貝に似てゐる。ところが其のクモガヒが又、後には蝟を以て代用され、蝟が繁殖のマジカルパワーを持つと信ぜらるゝに至つた。一たび蝟が認められると、次にはイカが信ぜられ、タコブネが信ぜられ、信仰の對象が轉々と應用されて行つたのは當然の歸趨である。前示の蝟壺は要するに其の一種の現れである。

希臘の或る時代の貨幣にも其表面に蝟を印刻したものがあつて、其蝟の頭は形式化して壺のやうに現されてゐる。尙クレテのミノス時代の畫には種々のものが出てゐるが、其の中にドルヒンを書いたものがあり、又鬼のやうな物がアポロンと共に描かれてゐる。美術史家はナチュラリズムが繪畫に輸入されたのであると觀てゐるが、これは云ふまでもなく子安貝から海獸への轉移である。或るマジカルパワーを持つものと異質同形の物は、同じく力を持つと信じられたが爲である。

斯様に貝が原始民衆の間に尊重せられた結果として、一方では又、貝が經濟的價值を有することゝなつた。斯くして茲に貨幣の原たる貝貨が起つたのであるが、後にそれが完全なる貨幣の形を取るに至つても、やはり其の面には、子安貝から變化した何物かの形が附けられてゐた。

エトルリアの銀貨には四つの形があるが、其の一つは車で、其の他は梟、鬼面、壺である。是等の貨幣は交換價值を有すると共に、マジカルパワーを有してゐるのであつて、ある人は古代貨幣の面に牛の顔が現してゐるのは、家畜との交換價值を表示するものであると云つたが、これも角を持つてゐるものは自らをプロテクトする力があると信ぜられたからであつて、等しくマジカルなものである。又中には魚類を現した貨幣もある。或る古代貨幣の圖には、中央に圓い形が現してあつて、それから水が盛に流出してゐるが、此の中央の圓いものは蝟の頭であるとせねば説明が出来ない。其れは中部ギリシアの貨

幣（壺に似た蝸の頭を現したものと比べて見ると判明する。

オルピアから出る貨幣の中には、鬼の面が現されたものがあり、又、鷲がドルヒンを掴んで飛んで行く圖形の物もある。此のドルヒンはギリシアではアポロンと一緒に附いてゐるのであるから、それが神聖物と考へられてゐたことに疑ひはない。

アテネから出た遺物の中に、腹から片足を出してゐるやうな土器、又三本の足を突出してゐるやうな形の土器が発見されてゐるが、これはタコブネと聯絡し、又タコツボ等とも聯絡する。タコガスの如く盛に用ゐられてゐるのは、子安貝から導かれて來たものであつて、最初に子安貝に専ら呪力を信じたのが、次いで同形形のクモガヒ、アコヤガヒの類に移り、次いでクモガヒに似た頭足類のタコに轉じたのである事は前に述べた通りである。バビロニアのエア神が持つてゐる壺から水の溢れ出てゐる形象も、畢竟頭足類の記號でなくて何であらう。

又、ギリシヤ世界の端で造つた貨幣の遺物にはメタと書いたものがあるが、これは大麥の穂である。麥の穂の形が子安貝に似てゐるから、漸次に類似形を求めて遂にこゝまで來たのである。後世の貨幣の表面に麥の穂が印刻されてゐるのも、同じ推移過程の延長であると思ふ。

ギリシヤの東端地方はスキタイ人の生活圏であるが、曾て同地で古墳を發掘した際に、死體の直近か

ら黄金製の魚が出た。一種の笏の如き物でなかつたらうかと想像されるが、兎に角章魚と同じく魚其のものが繁殖を意味してゐるのである。又、同じスキタイ式遺物の中に、酋長の所持してゐた盾があるが、それにもやはり魚の形の物が貼附してある。スキタイに於ける魚の呪的意味は、これで明かになつたと思ふ。

本國のギリシアでは此の間に母神信仰が發達した。出産を助ける神として後世に知られてゐるアルテミス、又は、愛と美との女神として知られてゐるアフロディテの如き、何れも貝殻と同一の屬性を持つものとして信仰の對象とされてゐたのであつて、貝殻を離れては存在がなかつたのである。古墳から出たペルシ式の注口容器には、其の前面にアルテミスが半身を現して二つの乳房を垂れてゐる姿を現したものがあつたが、是等は母神としてのアルテミスの職能を示してゐる。又、それから少し時代は遡るが、アチカで發見された前六世紀頃の女神像がある。これはアルテミスから一步を進めたもので、其の姿相は埃及の女神像と著しく類似してゐる。最も大切な點は、一方は胸に、他方は右手に柘榴を持つてゐて、其の外皮の裂隙からは赤色の實が露出してゐることである。古代人は血液を以て生命の源泉と考へ、同時に母親を生命の賦與者として考へてゐたから、血の色に髣髴たる赤色の漿液を包容する柘榴の果實をシンボルとして母神像に持たせたのである。私は支那の西王母の桃も之と同じ意味のもので、或はイヴ

が蛇に教へられて食べたと云ふ智慧の木實さへも、此のアルテミスの柘榴と一つの關係に繋がりはしないかと考へる。

六

次に古代東洋、メソポタミヤに移つて觀察すると、グデヤの圓壺印章に神が腰を懸けて水瓶を持つてゐると、其の瓶へ水が流れ落ちて又涌出してゐる姿が彫つてある。これは水が生命の親であることの象徴であると思はれてゐるが、それが繁殖を意味してゐる事は、二つの水瓶が増して四つになつてゐる事で分る。メーヤー教授は此水の神をアヌと一致せしめ、ヘウゼイは海神エンキであると見てゐるが、何れにしても水の神である。又アッシリアのオアンネスは海から來た神として知られ、半人半魚の姿に現されてゐるが、兎に角是等の神は初め單なる魚類であつたのが、漸次に人體の神への過程をとつたもので、それが全く人體を完成した時に魚は其のシンボルとなるのである。

斯の如き信仰は紀元前十八世紀頃までも残つてゐたが、後には流れて波斯に入り、更に印度に入つてマガルになつた。そして其のマガルは又ドラゴンとなり、蛇となり、遂には龜の思想に進むだ。だからマガルも、龍も、蛇も、龜もエジプトの鱷と同一に取扱ふべきものである。龜は、人間の精力を恢復する命の水を涌出させるために心棒となつて海を搔廻してゐると信ぜられてゐたから、生命の賦與者として

の母神の觀念が、やがて龜にまで轉移されたのである。最近に印度の或る地方から出た青銅の佛像を見ると、其の佛は呪棒を持つてトリトンの中から顔を出してゐる。これは男性の産官を意味すると云はれてゐるが、從來述べて來た所と照らし合はせて、頗る興味を覺える。

更に支那に就いて見ると、漢代のコレクションの中に、やはり顔は人間で下半身は魚に成つてゐる物がある。古く斯かる物が存在したと云ふ事は、支那の古代にも半人半魚神の思想のあつた事を證明するものであるが、なほ別に黒色の陶器面に、龍と麒麟との複合物のやうな物が現されてゐる。一見海獸のやうであるが、其處にドラゴンのエレメンツが加はつてゐるといふ事は注意に値する。支那の龍が神性を具へた動物であつたことは云ふまでもないが、それと同様に魚類も龜も神だつたのである。所謂青龍玄武、また墓碑の龜扶の如きは、明らかに此の關係を語るものである。

以上に於て私はギリシヤを中心とする諸國間の文化移動を説き、進んでそれが波斯に入り、印度、支那に轉入したことを注意せんが爲に、子安貝から出發した諸種の信仰對象について述べたが、此の文化移動線が、更に暹羅並に太平洋諸島から遙に海を越えて、南北アメリカにまで延長してゐることは疑ひのない所である。一寸聞くと突飛に考へられるかも知れないが、我々は之に就て十分の研究を重ねた結果、此の肯定には何等の危険性もないことを主張することが出来る。

七

そこで話は飛ぶやうであるが、直ちに對岸南アメリカに移つて述べることにする。先づ我々の主張を證する物には、ペルーから出た彩壺がある。其の面にはギリシアのタコ壺と同じ蛸の姿が現されてゐるが、これは云ふ迄もなくギリシアからの移轉である。さもなければ、斯かるものが突然に現れる理由はない。

又、コロンビアのチブチャでは、動物の形又は人の形をした物を太陽神に獻げる風習があるが、其中に銅製の魚がある。是等も南米に於て希臘其他と同じく魚の形が古來神聖視されてゐたことの一證ではないであらうか。更に、前と同じペルーのレクアイで、黄地に黒赤模様の物が出てゐるが、これは一見油壺のやうなもので、それに角形の把手が出てゐる。ギリシアの片足をつき出した土器と同一性質で、日本の彌生式土器殊に朝鮮金海、内地の三河などから出土した形式の物と同じ現れである。

其の外に又、古代ペルーのナズカから注口土器に魚類を描いたのが發見せられた。予は之を宗教的の意味に取りたいと思ふ。

エクアドルでは人物、植物の彫刻が多いが、其の中に交つて、或る怪しげな動物の形を現したのがあ
る。明らかに足が八本在るから蛸であらうが、これも呪的宗教的の意味を有してゐて、曾て何かの儀式

に用ゐられたものであることは疑ひがない。

次にホンデユラスのコパンには、ステレの彫刻があつて、それに現されてゐる腰帯の中には人の顔と、それに近接して螺貝とが附けられてゐる。これは明らかに古代エジプト人が繁殖の呪物として貝殻を用ゐてゐたのと同じ意味で、其の螺貝を附けた腰帯を纏ふ事に依つて繁殖の呪的効果を得んとしたものであらう。此の事は、類似の腰帯が、東アフリカの海岸でも、又、オセアニアでも用ゐられてゐる事實と比照して、確認することが出来る。そして此の技巧、此の技術が、決して別々に工夫されたものではなく、單原的であることは、何者かに依つて、それが單原から出たものでないと云ふ反證が擧げられない限り、眞實でなければならぬ。私は更に之を日本に持つて來て語ることが出来ると思ふ。

八

日本では子安貝といふ名が残つてゐるにも拘らず、其の繁殖についての呪的目的は忘れ去られて了つて、今日では單に水に溺れないため、若くは躓かない爲の呪物たるに止まつてゐるが、此の貝が安産の呪物として尊重されてゐた事實は、『魚鑑』本草記聞』等に依つて明らかに認められる。恐らく紀元前に既に其の分布を見たのであらう。私は此の子安貝を本として、此の小論述の最初に掲げた五項の問題を解決することが出来ると思ふ。

第一に、日本にも龍神信仰があつた。古事記又は日本紀に出て来る八岐大蛇は明らかに龍神である。そして龍神が男性である時には其の娘が母神である。例へば古事記に據ると、ホオリの命の妻神、トヨダマヒメの命は海神即ち龍神の女である。そして其れが八尋和邇に化つて匍匐委蛇して産まれたのがウガヤフキアヘズの命であられる。母神であると云ふ事は即ち生命の附與者であることを意味する。朝鮮の神話でも、やはり生命の附與者は主として母神であり、或る場合には父神である。生命の附與者は自ら生命の永久保持者たることを要するが、斯かる永遠の生命を保つためには、血液を要する。そこで印度其の他の神話では、龍神の殺人行爲が多く語られてゐる。日本の八岐の大蛇は其の一變形であつて、犠牲の鮮血を吸ふことに依り生命力を得て、マジツクをする者に之を轉與するのである。

第二にキサギヒメとウムギヒメとの力に依つてオホクニヌシの神が復活し得たと云ふ説話は貝が生命の保持者であると云ふ信仰から生れたものである。キサギはキサカヒ、ウムギはウムガヒの約で、前者は細螺をキサゴ又はキシヤゴと呼ぶ事から考へて螺貝類、後者は母貝で子安貝の事を云つたのであらうと思ふ。是等の貝が生命保持者としての原性を持つと信ぜられてゐたが爲に、之を人格化して、オホクニヌシの命を助けるといふ説話を生んだのであるとすれば、立派に理路が立つて来る。

第三には鹽乾珠、鹽滿珠の問題であるが、これ等は要するに當時存在したパール尊重の反映であつて、

最初は子安貝のみに持たれてゐた一種の靈力が、後には眞珠其の他の代用物に轉移して、廣く貝珠にマジカルパワーを認めたのであらう。浦の島子の玉手箱も恐らく此の干珠、滿珠の變形であつて、それを完全に保持してゐれば永遠の生命を得られたのであつたが、戒を忘れて聞いたから忽ち老と死とに直面したのである。

第四のスサノヲの尊がオホクニヌシを蛇室に入れられた時に、オホクニヌシがスセリ媛から與へられた蛇のヒレを振つたら、蛇は忽ち退散したと云ふ話は、蛇のヒレ恐らくは鱗或は齒が生命を護持する力有るものと觀た考へから來てゐる。是等の物に靈力の存在することは既に述べた所である。

第五にイザナギの尊が桃の實を投げられたら八種の雷神が退散したといふのは、所謂 *Magie Flight* の説話であるが、其モチーフは桃の實が呪力を持つてゐるといふ信仰に基づいてゐる。桃が無限の生命力の淵源であることは、西王母の傳説に依つて明瞭である。そして其れが廣く世界的なものであることは、アルテミスの柘榴に依つて知られる。

斯の如く五つの問題の總ては、唯一つの生命欲求の思想に依つて解釋が附くのであるが、此の思想は古くマジックの形をとつて現れてゐるのであつて、後には轉じて不老不死の薬を求める運動にまでなつた。斯かる思想が、古來廣く世界の各所に存在したのは、決して各地に於て單獨に發生したのではな

く、一の中樞から多くの末梢に、各末梢から又他の末梢にと傳へられて、遂に今日に見るが如き世界的分布を見たのである。

（附言）本會理事加藤博士の慈惠により、まだ十分熟しない生命欲求運動を考古學的に考察した研究の一端を割いて、「東西文化の連続の實例」といふ講演に宛てたのは、願ひてイムポーダンスを置き違へた嫌ひがある。講演筆記を見ると、私のいつたことが可也多數に省略せられてゐるが、今それを一々増補する時間を有たない。従つて私は此内容については、校閲はしたものの、或程度までしか責任を負へないやうな感じがする。此主題については研究完成の後更に書いて見たいと思つてゐる。こゝに不完全ながらも意見の一部を發表して、豫め私の研究について的一般を大方の諸氏に見てもらふ機會を與へられたことを加藤博士に感謝する。

昭和己巳晚秋、大元帥陛下學行陸軍特別
大演習於茨城縣、時臣爲太郎被召大本營
浴單獨拜謁光榮、感激之餘謹賦一詩

酒井尊農居士

高秋萬里快晴時。大本營頭翻錦旗。

咫尺天顏更賜榮。光榮皆是父祖慈。

昭和庚午新年書懷

農政不振萬感生。慨然加歲又新正。

尊農固是尊皇意。難禁赤誠報國情。